

『D.H.ロレンス研究』(*Japan D. H. Lawrence Studies*) 第19号(2009)(日本ロレンス協会刊): pp. 64-68

Jim Phelps and Nigel Bell, eds., *D. H. Lawrence Around the World: South African Perspectives*. (Empangeni, South Africa: Echoing Green Press, 2007)

本書は過去70年間、南アフリカにおいてロレンスがどのように受容されてきたかを5部構成で明らかにしたものである。序論によれば、1999年に筆者が編集した*The Reception of D. H. Lawrence Around the World* (Kyushu Univ. Pr.)に南アフリカにおけるロレンス受容論文がなかったことが本書編集の動機の一つであったとのことである(xv)。当時J.Phelpsを知っておればよかったのにと今更ながら悔まれる。本書が出版された2007年、イギリスでは*The Reception of D. H. Lawrence in Europe* (Continuum)が刊行されたが(*Archiv* <ドイツの英文学会誌>[2008]掲載の筆者の書評参照)、当然のことながらこの論文集にも南アフリカにおける受容論は含まれていない。ロレンス受容を世界的視野で見ると、本書を含む上記3論文集が便利な参考文献となろう。

これまで南アフリカ発のロレンス研究書にはT. A. Smailesの詩論(1970)があったが、それ以外の南アフリカのロレンス研究活動についてはあまりよく分からなかった。本書はその点をかなり補ってくれる貴重な論文集といえる。第1部は主に、南アフリカの7つの大学でこれまで行われてきたロレンス文学研究・教育の実状を論じた論文、第2部は南アフリカ出身の学者による既発表論文、第3部は南アフリカ出身の学者による書き下ろし論文をそれぞれ収めている。第4部はロレンス讃歌の創作詩、第5部は補遺となっている。

第1部では13人の学者によって大学におけるロレンス研究・教育のあり方が報告されている。その中の一つFrancois Hugo論文や第5部収録のJ. A. Berthoud とC. O. Gardnerの共著論文"Christina van Heyningen"によれば、南アフリカにおけるロレンス研究や英文学研究全般の先駆的指導者はChristina van Heyningenであった。彼女はオランダ系イギリス人で南アフリカの3つの大学で教え、その影響力は絶大であった。南アフリカには'National Socialism' (314)や'Christian National Education' (315)といったイデオロギーが支配的となる傾向があったが、彼女はそのようなイデオロギーに左右されることなく、「どの人間もその人自身の宇宙の中心だ」(315)という信念をもってロレンス文学の教育や英文学教育を行った。その際、作品に対する学生の「反応」(313)を重視するという教育方法で学生の文学観賞力を高めるべく努力を惜しまなかった。彼女の薫陶を受けた門下生は南アフリカのみな

らず世界各地の教育機関で教師となって活躍しているという。

南アフリカにはもう一人有力なイギリス人学者J. C. F. Littlewoodがいた。Leavisiteであった彼はある時ロレンス評価の論文”Lawrence, Last of the English” (12-25)を発表したところ、van Heyningenがそれに対する批判論文を書き、Littlewoodのようにロレンスの欠点を見ないで彼の作品を高く評価するような評価の仕方はバランスを欠いていると注文をつけた。こうしてLittlewood vs. van Heyningen論争が始まった。その論争経過が第1部に再現されていて(26-41)大いに興味をそそられる。今読み直すとvan Heyningenの方に分がありそうに見える。

Littlewoodは大学当局の心証を害するような発言をしたため2年ほどしか在職できず、大学を追われたようであるが(322)、もう少し長く南アフリカの大学に留まっていたなら、彼に続くLeavisiteが多く生まれたかもしれない。しかしLittlewoodが去ったあとも南アフリカのあちこちの大学で多くのLeavisiteが教えていたから、F. R. Leavisの影響力はイギリス同様南アフリカにおいても非常に大きいものであった。

南アフリカにはvan HeyningenとLittlewoodのほかに異色の学者Guy Butlerがいて孤軍奮闘していた。Christopher Thurman論文(第3部所収)によれば、Butlerは伝統的な英文学キャンノンに則った教育にこだわらず、南アフリカの視点に立った教育を行うべきだと考え、文学教育シラバスに南アフリカ文学を積極的に導入した。「1950年代、リーヴィス主義が支配的だった」(269)南アフリカの大学でButlerの主張は非常に勇気のいるものだったろうと想像される。彼は’South African identity’(270-271)を追及していた教師かつ作家でもあったから、彼の母国南アフリカへの思いが人一倍強かったのであろう。

のちにイギリスのケント大学教授となったMark Kinkead-Weekesが南アフリカ出身であることは第1部収録の氏の論文”South African Reminiscences”を読む前から知っていたが、長らくヘブライ大学教授であったH. M. Daleskiも南アフリカ出身だったとは”First Impressions of Lawrence”を読むまでは知らなかった。それによると、氏が後にロレンス研究成果を*The Forked Flame*に結実させる端緒は実はUniversity of Witwaterstrandの学生時代に書いたロレンスに関する修士論文にあったとのことである。*Sons and Lovers*についての修士論文の一部が*The Forked Flame*の*Sons and Lovers*論とあまり変わっていないことが回想されているところが非常に面白い(44-45)。氏はヘブライ大学に職を得た後、ケンブリッジ大学でロレンスに関する博士論文を完成させるのだが、その土台が既に南アフリカでのMA論文にあったのである。

第2部には9編の論文が収められている。なかでも南アフリカならではの特色ある論文2

編を取り上げたい。一つはMark Kinkead-Weekes論文、もう一つはChristopher Heywood論文である。前者はロレンスの小説*The Rainbow, Women in Love, St. Mawr*に描かれた「人間と大地のつながりの感覚」(131)を、ロレンスの影響を受けた南アフリカの作家Bessie Headの小説*When Rainclouds Gather* (1969) や*A Question of Power* (1973) などに描かれた生命観と比較し両者の共通性を探る斬新な好論考である。

Kinkead-Weekes論文は今回初めて読んだが、Heywoodの”Bushman Folklore”論文は以前DHLRで読んだことがある。しかし今回「アフリカの観点」のもとで再読すると、ロレンスとアフリカの強い結びつきを再認識させられる。ロレンスは1920年代初めに、南アフリカ出身の画家Jan Jutaから*Specimens of Bushman Folklore*を借りて読んだことがある。同書に、ロレンスの詩集*Birds, Beasts and Flowers*に収められた数編の詩の創作上のヒントになったとおぼしき箇所がいくつかあるとHeywoodは例証している。例えば*Specimens of Bushman Folklore*の”Prayer to the Young Moon”はロレンスの”Invocation to the Moon”を、”A Certain Snake”はロレンスの”Snake”などを思い出させるという(160-162)。Heywood論文はロレンスとアフリカとの結びつきの深さを考えさせる優れた論考といえよう。

その他注目すべき論文として二つ挙げよう。一つはロレンスの詩”The Best of School”を「教育」の本質たる「全存在の覚醒と浄化」(109)を歌ったものとして評価できるとし、それとは反対の子供の教育を歌ったW. WordsworthやH. Vaughanの詩と関連させて論じるTrevor Whittock論文である。もう一つはロレンスのschool poemsに描かれた生徒と教師の関係を南アフリカの教育と重ね合わせて論じたJ. Phelps論文である。Phelpsは、南アフリカの教育が「明確なヴィジョン」(124)をもちうるなら、ロレンスのschool poemsにみられるような生徒と教師の間の「創造的学習」(124)こそが求められるものだと南アフリカの教育のあるべき姿を論じている。このような教育論は南アフリカに限らず、日本にも当てはまる示唆に富んだ教育論といえよう。

第3部には5編の論文が収められている。中でも興味深いのはDawid de Villiers, Peter Merrington, C. Thurmanの各論文である。de Villiers論文はOswald Spenglerの西洋没落論とロレンスの西洋衰退論との間に見られる類似性を比較するとともに、Spenglerにはないロレンスの独自性をも明らかにしている。西洋は袋小路に入り活力を失ったとロレンスはいうが、彼は同時に「思想の冒険家」として未知の世界へと邁進する力を持ち、新しい世界を創造する生命の炎を信じている。このような未来への確信がSpenglerにはない、また、ロレンスが愛読したT. Hardyの宿命論にも同様に生命の炎への確信が欠けていると力強く論じる(209-210)de Villiers論文は大いに読ませる。

Merrington はロレンスとJan Juta兄妹とのつながりを論じつつ、ヨーロッパ人が当時Capeを地中海世界になぞらえ、'Mediterranean Cape' (249) として捉え、ヨーロッパ中心的な南アフリカ観が一般的であったと指摘するところは、サイードのオリエンタリズム論を思わせる。サイードによれば西洋人はオリエントを自分たちに都合のいいように捉えていたが、南アフリカの場合もそれに似ていて、西洋人は地中海的イメージで南アフリカを捉えようとしていたのである。西洋中心的な見方は東洋のみならず南アフリカにおいても顕著だったのだ。

そのような西洋中心的世界観に反旗を翻したのがGuyButlerであるとThurman論文は教えてくれる。そのようなButlerの一面については先に少し触れたが、Thurman論文のもう一つの優れた点は、Butlerは無自覚のうちにロレンスと類似の考えを持っていたと指摘するところである。Butlerはヨーロッパ世界とは異質の南アフリカの文化・文学を明瞭に意識していたが、同じような文化的差異観はロレンスの*The Plumed Serpent*にもあつて、もしButlerがその小説を読んでいたなら、そこに描かれたメキシコという非ヨーロッパ的世界の「浅黒い人種」(283)の文化に対するロレンスの深い理解に共感しえたであろうとThurmanは指摘する。同論文は南アフリカの文化を視野に入れたユニークな文化的差異論といえる。

第4部は“Owed to Lawrence” (Norman Morrissey)と“Green Mambas” (J. Phelps)というロレンス讃歌が収められている。いずれもロレンスへの思い入れ十分の創作詩である。

第5部には南アフリカの大学で書かれたロレンスについてのMA論文や博士論文、雑誌掲載論文などが紹介されている。18編のMA論文に比べ、博士論文はわずか5編と意外に少ない。多くの研究者が編者の一人J. Phelpsのようにイギリスの大学で博士号を取得しているのかも知れない。

本書は各論文の長短が目につきはするものの南アフリカにおけるロレンス受容が概観できる好著といえよう。

(飯田武郎)